浜田市議会議長　原田義則様

議員名　岡野克俊

調　査　研　究　活　動　報　告　書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

．期　　間　　平成２７年５月２０日（水）～５月２１日(木)

２．視察先と内容

① 広島市安佐南区　　広島市立祇園東中学校
「生徒の自主性を育てる学びの拠点の環境作りについて」
講師　　升原　一昭　校長

② 高知県高岡郡越知町　　越知中学校
「飛躍的な学力向上への取り組みについて」

．参加者　　佐々木　豊春　岡本　正友　　上野　茂　　柳楽　真知子
岡野克俊　　野藤　薫（①のみ参加）

４．調査経費　　8,952　　円

５．調査研究活動の概要　　別紙

浜田市議会 受付 28.4.19

①祇園東中学校

「生徒の自主性を育てる学びの拠点の環境作り」への取組みについて

- 本校の教職員の目標！「学びの授業を作る」これに尽きる。
- 現在、全校生徒は６５９名、各学年６クラスから７クラスの編成
- 学校はアストラムライン沿線に有り西原駅から数分の利便性がある。
  広島市内では珍しい自校方式の給食が魅力になっている。
  安佐南区は校区選択性をとっており、祇園東中は一学年３５名の枠を設定、ことしは７７名の応募。
- 昨年度全教室エアコンが完備された。
- 周辺は広島市への通勤の為の開発がおこなわれ、１０年前には暴走族の拠点にもなって、学校も荒れていた。（授業中の徘徊、異装、髪染めなど）
- 子供たちへの声掛けや授業の改善で、学校を変えようと当時の校長が提案、静岡県富士市の岳陽中学へ視察、その授業実践に感動！祇園東中も実施へ。
- 学校教育目標は「自立　実行　友愛」社会に出た時に自立して生活できる事を目指す。
- 挨拶を積極的に出来るように取り組む。
- 「活動的で協同的で表現的な学び」教師は、夢中になる学び作りを目指す。
- 言語活動を既定に据えた、教室での「コの字型」授業。

- 考えを聞く、話し合う、学びあいを促進する小グループの授業
- 教員の授業研究を促進し、教科書をベースに発展的な授業が出来るよう、教師は授業公開を年一回は実施する。
- 時間を守る。時計を見る。自主的に行動できるよう、テスト以外はノーチャイムを実施。
- 子供たちの観察、発達障害の早期発見、保護者との連携。
- ３年生のＱＵテスト、自己肯定感は３年生で78%
- 進学率第一志望達成率は 84%
- 課題もある。平成２６年度、不登校６、暴力行為１、いじめ０、携帯電話等１
  学校は事が、起きた時の対応が大切、組織としてすぐ動く、まず話を聞く。
- 公園は幼児、小学生向け、生徒たちが、外で思い切り遊ぶ所が無い。
- 部活動、地域のクラブへ加入、ユースチームに入り海外へ研修に行く子供もいる。

Ｑ：学校経営で教育委員会から指導は有るのか？
Ａ：かつて広島県では、是正指導が有った。（文科省→県教委→市教委）
　学校経営、国歌斉唱、国旗掲揚などで有った。教育は基本法や指導要領に沿って行う。
　各種教育施策もその法に沿ったものでないといけない。

Ｑ：部活動の対応は？
Ａ：教員ではすべて指導できない。地域ボランティア（数名謝金が出る）へお願いしてい
　地域クラブへ通う子供は親が謝金を払っている。

Ｑ：授業はすべてコの字、小グループなのか？
Ａ：子供の学びで別の形（保健体育など）は取る。

Ｑ：先生方によって教え方など違うのでは？
Ａ：授業研究を通して先生の技量を上げていく。

【所　感】

各学級に大型モニターが有り、パワーポイントで授業を進めている。（授業・資料の作成）

コの字や小グループの授業だが、先生の目が行き届いている。（先生の位置）

男女比が同数に配慮され、対話も積極的にされている。（席の配置）

学校の教育目標や授業、学習の形態、授業の工夫など、現在盛んに言われているアクティブラーニングの様式を取り入れていると思った。

大いに参考にすべきと考える。

【高知県越知町立越知中学校の取組概要】

高知県中央の山間部、清流日本一の仁淀川に臨む越知中学校は５年前から学力向上の取組を進めている。

学校のモットーは「個人の能力差、家庭や地域の能力差、教員の経験や力量の差によって学力差を生まない」ことで、校長を中心としたサポートや評価体制の下で学校が一丸となり、授業づくりを進めている。

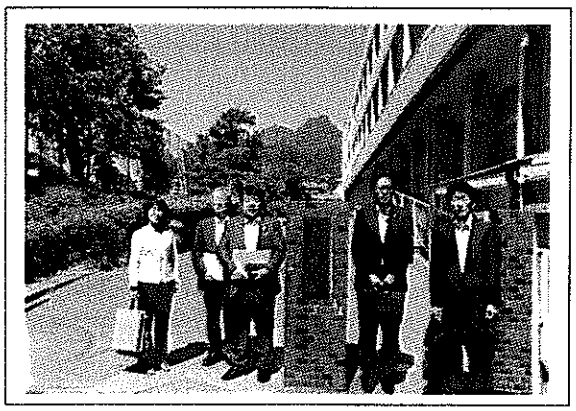
同校がまず取り組んだのは、「教師が子どもと向き合う時間を増やす」ための教務改革で、役割分担を徹底し職員会議の縮減や学校行事の効率化を図り、年間１００時間の授業時間増をめざした。次に学力向上の肝となる授業改革では、「考える力」を伸ばすため、生徒同士が考え方を共有できる班活動や発表を積極的に取り入れた。

授業は①課題の提示②自力解決③班活動・情報の共有④振り返り　で構成されており、それぞれの項目は細かく時間配分され、グループワークや振り返りの時間を十分に確保する授業づくりが進められている。

定期試験の出題形式や難易度を統一し、理解度を数値で分析できるようにした結果、他教科との比較も可能となり、教員同士が刺激し合う効果も生まれている。「点数が低いのは生徒のせいではなく指導のせい」とされ、まず教員にその意識を持たせた。

同校は２０１０年度までの全国学力テストでは、全国平均を下回る結果が続いていたが１３年度の３年生の結果は国語、数学とも急上昇し、特に数学Ｂでは３０ポイント以上も上昇している。

指導方法改善による学力を向上させる同校の取組に、全国から視察が相次いでいる。



【校長先生の聞き取りから】

・学店の結果は全国平均を下回り、平成２４年に赴任して来たときには「学力が低い」と感じた。小学校も低かった。

現在はすべて１００を上回る。

・越知町は昔は飲み屋街と遊郭の町だった。その基盤があったため、荒れた

環境にあった。子どもたちを変えることに取組を始めた。

・地域の方々も学校が町の誇りと言っておられる。

・小中一貫、連携校の難しさはあるが、カリキュラムをいかにつくるか、教

職員の意識改革が重要な視点。中高より小中が難しい。
・東北以外のすべての地域を勉強に行ったが、小中連携は意識されてない。小学校の教育に尽きる。発達段階における学力をつける。
本当の意味で、小中一体になるとはそれぞれを無理にすり合わせるのではなくて、小学校でやるべきことをきっちりやるシステムが大切。
・平成２４年４月に赴任してきた当時の課題は保護者や地域が学校に期待していないことだった。学校が地域の思いを理解していない。
学校が組織として機能していない。組織的な公務ができていない。責任ある仕事の仕方を教職員がわかっていない。学力をつけることをしていない。教育公務員であり越知町の職員として町のために貢献する意識がない。他の教科や仕事には口出ししない。
・学力や部活は地域の誇りにするしできて当たり前。小規模集落がたくさんあるので、地域に貢献する生徒を育てる。学校行事を地域や保護者が楽しみに。学力向上のために学校行事などは削減しない。越知町で受けられる教育を受けることをうりにしていこう。子どもたちに非行など問題が無いのは環境が良いからではなく、危機管理を徹底してやっているから。
県内外からの視察が多く、地域の人が越知町を誇りに感じ始めた。
・先生方がしなくてはいけないことは、生徒の人格を豊かにし、世の中を生きていく社会的能力を高め、将来に対応できる学力・能力を育てることであり、教科書に書いてあることを切り売りすることではない。教科書に書いてあることを子どもたちに身につけさせるのは当たり前で、そこに書いてないけれども生活の中で使える能力をみがくこと。学習指導要領にも明記されていない。
越知町はほっておけば無くなってしまう地域。地域を豊かにするために学校として子どもたちをどう育てるか。町民の願いに敏感になる、どう子どもたちに結実させていくか。神輿も担げないので中学生が担ぐ。
当たり前にやればきちんと結果はついてくる。一生懸命やったけど子どもたちに学力がつかなかったのはうそ。教育ぐらい如実に成果がでるものはない。
・公務員的な体質をいかに払拭するか。教科担当が、責任をもって教科の学力を保障するため、他の先生の力を取り入れ組織を動かし利用する。オープンにし隠さない。失敗は良いが失敗を隠すことはだめ。責任をとる。チャレンジには失敗も多い。結果を出さない仕事は仕事ではない。出るように仕事をする。
・校長として各先生方に求める公務は「正しく目標を設定する能力」「目標

の達成を見届けること」「先生方や良い手本となってほしい」
・県で自己目標シートをつくっており、勤務評定につながり、給与の上がり方も変わってくる。
・自分でたてる目標が３つある。ひとつは教育能力で教育の専門家として、各教科で活用能力を育てるためにどのように目標設定し取組むか。組織構造能力として組織が円滑に公務を遂行し効果をあげるために、どのように人間関係を築くのか。ヒステリックな人、協調性のない人が効率を下げる。職務能力として効率的に公務を遂行するため、どのように分掌業務を行うのか。職員会を基本的にしない。全体の校務を見て工夫する。
・学力をつけるのなら、学力をつけるだけの策をうたないとつかない。
学力を育てるための策。３年前に赴任してきたときは極めて学力が低かった。家庭学習だけで、一定の基礎がつくだけの宿題を出し続けなくてはならない。授業の中身はアクティブランニング（課題解決学習）で行うが、定期考査を先生の育成に使う。
・定期考査は基礎的内容７０％、活用的内容３０％で作成する。通知表に７以下の成績がついている生徒はいない。
・定期考査問題は学期当初に作成し、内容を生徒保護者に周知する。
・宿題は毎日課題として英・数・国は毎日だされ、毎週課題として理・社は週末にだされるが、外部の人（２人）に宿題のまる付けを行ってもらい、出題問題に対する意見も出る。
・定期考査のシステムが学力をつけるためのシステム。定期テストを受けさせる以上、力をつけさせてから受けさせる。
・成績が上がったとき、一番喜んだのは先生。先生型は充実感や達成感があり、疲労感はない。教育長は最後の最後まであがいたものが結果をだす。あきらめたものだめ。県内の多くの学校は視察に来るが結果がでないとなげく。それは管理職が達成するまで見届けるかどうか。

【感想】
学校のモットーは「個人の能力差、家庭や地域の能力差、教員の経験や力量の差によって学力差を生まない」ことで、校長を中心としたサポートや評価体制の下で学校が一丸となり、授業づくりを進めているように、校長の「教育ぐらい如実に成果がでるものはない」という強い信念を感じた。